

孫楷第の中國小説書目編纂と日中の學術交流

稻森 雅子

戯曲小説研究者孫楷第（一八九八—一九八六）は、中國通俗小説に關する初の本格的な藏書目録を編纂したことで知られる。それは一九三〇年代初頭の嚴しさを増す日中關係の中で完成されたものであった。すなわち國立北平圖書館と中國大辭典編纂處の共同で刊行された『日本東京所見中國小説書目提要』六卷、『大連圖書館所見中國小説書目提要』不分卷（合冊、一九三二年刊、以下『東京書目』『大連書目』と略稱）、『中國通俗小説書目』十二卷（一九三三刊、以下『通俗書目』と略稱）である。『東京書目』は東京十一ヶ所の所藏先で約百種を、『大連書目』は大連滿鐵圖書館大谷文庫の二五種を詳細に記録する。後續の『通俗書目』は北京周邊での調査分も加え六百餘種を収録し、卷末には注音符號による書名と著者名の索引も附す。『東京書目』『大連書目』は一九五三年に上雜出版社より重版が、『通俗書目』は一九五七年に作家出版社より増補改訂版が刊行されるが、序や出版緣起、凡例に大幅な改變が施され、『通俗書目』では附録五卷のうち二卷が削除された。その後もたびたび再版され、最近では『孫楷第文集』全三冊（中華書局、二〇二二年）の第一冊に収録され、現在も中國古典小説研究の基本的工具書としての價値を保ち續けている。

孫楷第の中國小説書目編纂と日中の學術交流

我が國では、孫氏書目に基づいた大塚秀高氏の『中國通俗小説書目改訂稿（初稿）』（汲古書院、一九八四年）『増補中國通俗小説書目』（同、一九八七年）が著名であり、さらに孫楷第の來日前後の動向については稻畑耕一郎氏の「傳增湘と内藤湖南——新發見の書函數通からの考察——」に言及がある³。しかし、東京で熟閱調査を行った日程等に關してはこれまで詳細な考察は無かつた。本稿は、これら小説書目編纂過程にどのような人物が如何に關與したかの検討を通じて、當時の日中學術交流の一斑を窺おうとするものである⁵。

一 生い立ちから大學時代まで

孫楷第、字は子書、號は柴進里人。光緒二十四年（一八九八）河北省滄縣の讀書家の家に生まれる。五歳の頃より祖父の薰陶を受け五經を諳んじるまでになり、宣統二年（一九一〇）現在の高級小學校に相當する新式學堂に入學した。折しも直隸提學使であつた傳增湘が視察に訪れ、孫少年の秀才ぶりに目を留めた⁶。後年傳增湘は、國民黨の要人で滄縣出身の友人張繼に會て印象に残つた聰明な少年の搜索を依頼、偶然にも孫楷第との縁が復活した。民國十一年（一九二二）孫楷第は

北京高等師範學校（のちの北平師範大學）に入學、傅增湘は孫楷第を子息の家庭教師として自宅に住み込ませた。當時北平で東方文化事業總委員會の實質的責任者であつた橋川時雄は「孫楷第も傅增湘の弟子ですよ」と回想しており物心両面で支援した様子が窺える。

また、孫楷第は北平師範大學で國文系教授楊樹達に師事し、訓誥學を學んだ。楊樹達は、光緒三十一年（宣統三年（一九〇五））の六年間日本に遊び、第一高等學校豫科、第三高等學校などで學んだ経験があり、歸國後は故郷の湖南省長沙に戻り葉德輝に師事している。

なお、魯迅がこの時期同大學でも小説史を教えており、孫楷第も受講していた可能性がある。このほか錢玄同や黎錦熙らの指導も受けた。これらの師弟關係がその後の研究生活に大きく關係してゆく。

二 來日までの経緯

孫楷第は、民國十七年（一九二八）に三十歳で北平師範大學を卒業し、翌年同大學で錢玄同の助手となる一方、中國大辭典編纂處の總主任黎錦熙の招きで同處編集員を兼ね、小説書目編纂に携わることになった。晩年孫自身も「明確我將走小説研究的道路、那還是在『中國大辭典編纂處』工作期間（私が今後小説研究の道に進むであろうということ）が明確になったのはやはり中國大辭典編纂處で働いていた頃だった」と回顧している。

民國六年（一九一七）胡適の「文學改良芻議」により文學革命が始まる。後年吉川幸次郎が「小説を中心としない文學から、小説を中心とする文學への轉換」と評したように、白話小説が徐々に注目されるようになった。民國十二年（一九二三）魯迅が『中國小説史略』（北京大學新潮社）を發表して以來、古版本の發見が相次いだ。一方、國語統一籌備會に

始まる中國大辭典編纂處でも白話語彙採録が必要となった。舊來、白話語彙を多く含む戯曲通俗小説類は、低俗との理由で四庫全書等にも採録されず、殊に通俗小説類は未整備で、成立時期や變遷の體系的整理考證が望まれていた。このような中、通俗小説書目の一刻も早い完成が孫楷第に託されたのである。

孫楷第は、まず國立北平圖書館の藏書を基礎情報として書目を作成した。次いで黎錦熙の紹介で孔德學校圖書館の實質的責任者であつた馬廉のもとへ通う。孔德學校は、北京車王府舊藏の戯曲本のほか多くの古版本小説を所藏することで知られていた。馬廉は、民國十五年（一九二六）魯迅から北京大學小説史の講師を引き継ぎ、當時隨一の戯曲小説版本の研究者として知られていた。因みに、日本在住の研究者と馬廉との交際は、辛島驍が最初であろう。同年八月、東京帝國大學學生であつた辛島が鹽谷溫の使いで初めて魯迅を訪問した際、魯迅が辛島に馬廉を紹介した。次いで翌年夏、辛島の先輩の長澤規矩也も訪中した際に馬廉と面會し、以後中國渡航のたびに訪問し交流した。さらに、北平に留學した吉川、倉石武四郎にも馬廉との交流の記録が残る。

民國十九年（一九三〇）孫楷第は國立北平圖書館副館長の袁同禮に招かれ移籍した。その後も中國大辭典編纂處に兼務籍を残して馬廉のもとに通い続け、「中國通俗小説提要」（『國立北平圖書館館刊』第五卷第五號、一九三二年）を完成させた。

孫楷第が日本現存の小説に關心を抱いたきっかけは、馬廉のもとでの調査中、長澤の作成した資料を見たことであつた。これは、橋川時雄が北京で出版した日中二箇國語による學術雜誌『文字同盟』第七號（文字同盟社、一九二七年）掲載の「日本現存戯曲小説類目錄」、或は馬

廉宅にあった手抄本とみられる。¹⁸⁾ 橋川の説明文によれば、長澤が大正十五年（一九二六）訪中時に持参したもので、馬廉舊藏資料もこれとほぼ一致する。しかし、記載内容が簡潔だったことが、さらに孫楷第の實見調査意欲をかき立てたようである。當初、馬廉に隨行する形で孫楷第も日本行きが計畫されていたが、馬廉は夫人の病氣のため歸郷を餘儀なくされ、計畫は頓挫する。¹⁹⁾ しかし、孫楷第は訪日への思いを断ち切れなかった。折しも夏季休暇を利用して北京を訪れていた長澤に相談、長澤は即座に快諾したという。²⁰⁾ その後、所屬先の國立北平圖書館及び中國大辭典編纂處との交渉により、國立北平圖書館から二百元、中國大辭典編纂處から百元の旅費支給を獲得し、ようやく渡日が實現することとなった。

このように、通俗小説書目作成は時代の要請によるもので、その時期に適任者として孫楷第が拔擢されたこと、日本への渡航調査は孫楷第本人の意志により實現したものであることが確認できる。次に孫楷第の具體的な旅程を辿ってみよう。

三 東京・大連の調査旅程

當時は天津く門司（北九州）く神戸の定期航路があった。孫楷第の案内役を引き受けた長澤は一足先に歸國し、孫楷第は九月十二日に傳增湘から内藤湖南宛の紹介状と餞別五十元を受け取り、早速日本へ向け出發した。²¹⁾ 柴進里人の署名による「談話日本的『煎餅』」の冒頭に「去歲九月間、余以觀書東渡。在神戸傍岸、等候去所謂『東京』的火車（去年九月、私は書籍閱覽のため渡日した。神戸港に上陸し、所謂（日本の）『東京』行きの汽車を待った）」とあり、神戸から陸路東京に向った。しかし、十八日午後十時二十分頃、柳條湖事件が勃發した。翌日の『東

京朝日新聞』朝刊二面には「奉軍、滿鐵線を爆破。日支兩軍、戦端を開く」とあり、午前七時、午前十時と立て続けに號外も出されている。孫楷第はその十九日午前東京驛に到着し、前夜の柳條湖事件の第一報をまさにその驛頭で知ることになったのである。初版本『東京書目』の孫楷第序には「十九日東京驛着、遽かに遼東の變を聞き、悲憤に胸塞ぎ、歸國しようと思つたが思いとどまり、結局は牛込區（現新宿區東部）に宿をとり友人謝剛主と共に身を寄せた（十九日、抵東京驛、遼東遼東之變、悲憤填膺、欲歸復止、終下榻於牛込區、與友人謝剛主同寓）」と、孫楷第の動搖した心情が綴られ、北平圖書館の同僚謝國楨（字剛主）とともに逗留したことも記される。謝國楨は、明代史の研究者で留學の名目で一足先に來日し正倉院を見學、京都で内藤湖南と面會²²⁾の後、東京へ向かい、孫楷第とほぼ同時期に到着したと推測される。寄寓地は「孫文先生も曾てここに逗留されたという（據說孫中山先生曾旅居於此）」場所だったと回想している。

滿洲事變勃發を受け、多くの中國人留學生が歸國したことはよく知られている。孫楷第が歸國か調査敢行か悩むさまを長澤は「孫氏の友人は危惧の念を生じ、孫氏にも歸國を勧めた。孫氏は早速予の意見を徴したが、結局我々は學界は政界軍界に左右せられるものではないと云ふ意見で、孫氏は毎日市の内外の書庫を歴訪し、全く山水を外にしない」と記す。孫楷第にとつて苦澁の決断であったことは想像に難くない。話し合いの直後、長澤が孫・謝による宮内省圖書寮及び内閣文庫の閱覽を申請したことを示す資料が外務省外交史料に残っている。發信者は、外務省文化事業部長坪上貞二である。

「北平圖書館員謝國楨外一名内閣圖書館參觀許可方ノ件」
拜啓 陳者中華民國々立北平圖書館々員謝國楨、孫楷第ノ兩氏

ハ本邦圖書館視察ノ爲メ來邦 目下滯京中ノ處 來週中ニ内閣文庫參觀致度旨申出候ニ付 御差支ナキ限り御許可ノ上 出頭ノ節ハ便宜供與方御取計相成度 此段御依頼申進候 敬具

「宮内省圖書頭宛閱覽者略傳稿」(長澤規矩也自筆)

謝國楨 字ハ剛主、河南安陽縣ノ人、專攻ハ明末ノ歴史并ニ滿洲ノ歴史。國立清華大學研究院(即大學院)卒業、國立北平圖書館編輯員、北平圖書館ヨリ派遣セラレ、約二年留學。晚明史籍考等ノ著アリ。

孫楷第 字ハ□□^(二字省略)河北滄縣ノ人、國立北平師範大學國文科卒業、今師大研究院歴史科學門研究員、北平圖書館編輯員、專攻ハ小説史。中國小説ノ目錄解題ヲ作りツツアリ。

自記ノ畧傳ニ基キ長澤取捨増補ス 六年九月二十二日稿
孫楷第の到着から僅か四日後の二二日(火曜日)付の發給で、長澤の迅速な對應が窺える。また、「來週」すなわち二八日(月曜日)以降に閱覽を豫定したことも記されている。

調査開始にあたり、長澤の師で東京帝國大學教授の鹽谷溫と東洋文庫へ挨拶に訪れた。鹽谷は長澤ら門下生とともに内閣文庫の明版の『三言』『一拍』を發見し日中雙方で脚光を浴びていた。曾て鹽谷が中國に留學して葉德輝に師事した際、孫楷第の師楊樹達もまた門下生であった。従つて孫楷第と長澤とは、それぞれの師が同門の關係にあつたこととなり、これが直接的な調査の後ろ盾となつたといえる。

内閣文庫を皮切りに調査を開始した孫楷第は、東京附近十一ヶ所でのべ百十二點を熟閱した。期間の大半は内閣文庫で費やしたと思われるが、ここでは朝七時すぎから夕方六時すぎ迄作業に没頭し、晝休みも惜しみパン類を囓るのみで直ちに作業を再開していたという。この

ような鬼氣迫る姿を長澤は「かゝる篤學の士は實に珍しい。予も數度鄰人の訪書の東道をなしたが、氏と張菊生氏との行動には、我々北平に遊ぶものをして慚ぢしめるものがあつた」と評した。

長澤規矩也は、孫楷第より四歳年少で、當時は第一高等學校教授として戯曲小説研究に取り組んでいた。また長澤自身が「文化事業部がわたくしに研究費を補助してくれたのは理由がある。當時、文化事業部の招きで來朝した民國の學者の圖書館案内は必ずわたくしであつた」と回顧するように、孫楷第以前に傳增湘・楊樹達・張元濟・董康らを案内しており、知識経験ともに最適の案内人であつた。このほか、長澤は、馴染みの村口書店初代主人の村口半次郎を通じて藏書家の神山閨次とも面識があつたと推測される。さらに、初版本『東京書目』「緣起」には興味深い逸話が残る。

其舊本有記尺度者、有不記尺度者、則偕友人長澤君閱書時、彼攜有中國營造尺偶借用之、自閱書時則未嘗注意及板式大小、非自爲歧異也。

古版本の書誌に尺度を記すものと記さないものがあるのは、友人の長澤君と閱覽した時、彼が中國の營造尺(當時の建築用物差し)を持參したのをたまたま借用し用いたが、ひとりで閱書した時は板式の寸法に注意していなかつたので、記載に有無があるのは私意によるものではない。

『東京書目』には營造尺による匡郭の記載が六ヶ所確認できる。我が國では匡郭計測の習慣があつたが、中國では文字數を記すのみであり、管見の限り孫楷第より早い中國人による刊本の匡郭計測記録は楊守敬『日本訪書志』に一箇所(卷四『集韻』、一葉分を計測)ある程度である。孫楷第も匡郭の計測は初體驗であつたと思われる。

もう一人の案内人に、傳增淵と親しかった文求堂主人の田中慶太郎⁽⁴⁵⁾がいる。田中は書誌學者島田翰の學友で、明治三十三年（一九〇〇）末、上海へ渡航、明治四一年（一九〇八）から三年間北京に住居を構えるなどして盛んに唐本や書畫を取引し、當時我が國隨一の唐本商であった。中國語が堪能で學識も深く、羅振玉、魯迅、郭沫若、内藤湖南など多くの日中の著名人と交流があり、長澤も文求堂の常連の一人であった。田中は舊加賀藩主前田家藏書を收藏する尊經閣文庫（東京）とも通じており、孫楷第も田中の案内を受け明版の『古今小説』を閲覽している⁽⁴⁶⁾。

東京での調査を終えた孫楷第は、當初豫定していた京都市行きを取りやめ、日本の租借地大連へと向かった。その経緯について初版本『大連書目』の序文には次のように記される。

余既於民國十九年十月閱日本東京公私所藏小説訖、聞大連滿鐵圖書館藏日本大谷氏捐贈小説多種、中頗有舊本爲內地所不易見者。乃決意往訪。先由人友長澤先生函館中松崎鶴雄氏、爲余先容、託其照拂。十一月八日抵大連後、復識館長柿沼氏、知余來意、引余入專門研究室、與以方便、供待甚厚。

民國十九年十月私は日本東京の公私所藏の小説の閲覽を終え、大連滿鐵圖書館には大谷氏寄贈の小説が多種あり、中には内地でも見られないものも多くあると聞き、訪問を決意した。事前に友人の長澤先生が大連滿鐵圖書館の松崎鶴雄氏に紹介状を送り、私のために推薦して下さい、面倒を見て欲しいと依頼してくれた。十一月八日大連に到着すると、さらに館長の柿沼氏と識り合った。柿沼氏は私の來意を知り、私を専門研究室に案内してくれ便宜を圖り、厚遇してくれた。

孫楷第は北九州の門司港經由で八日大連に到着したと考えられるが、その手配一切も長澤主導によるものだった。長澤は鹽谷、辛島らを紹介し松崎とも既に相知る關係であった⁽⁴⁷⁾。

松崎鶴雄は、熊本の同心學舎出身で狩野直喜の一年後輩である。同郷の竹添井宅に寄宿した後、中國に渡り、長沙で楊樹達や鹽谷らとともに葉德輝に師事した。大正九年（一九二〇）からは大谷本の整理を擔當していた。民國十六年（一九二七）馬廉が大連滿鐵圖書館を訪れ『警世通言』を閲覽して以降、大連滿鐵圖書館と北京學界との交流が始まったといひ、松崎の回想録⁽⁴⁸⁾には昭和二年（一九二七）十月北京での楊樹達・馬廉・袁同禮・錢稻孫・黃節らとの集合寫眞が収録されている。松崎は、孫楷第の訪問直後に同館を辭職しており、孫楷第の面會は最後の好機であったことになる。なお、『大連書目』再版本では松崎の名は削除されている。

館長の柿沼氏は、東京帝國大學哲學科卒業。東京市立日比谷圖書館勤務を経て大正八年南滿州鐵道株式會社に入社し、米英獨への留學後、滿鐵大連圖書館長に就任、戦後は國立國會圖書館に勤務した人物である。

大連では東京に比較し二倍の効率で、わずか五日間で作業を終え、出發から約二ヶ月後の十一月十五日には、天津事件直後の天津港に歸着し、直後の二十日には楊樹達を訪ね歸國の挨拶をしている⁽⁴⁹⁾。

ここに、當時の學界の雰囲気窺う逸話がある。滿洲事變直前の昭和六年（一九三二）七月二日〜九月十八日の六十日間、橋川時雄は『續修四庫全書提要』編纂準備のため中國各地を視察した。九月一日、湖南省長沙で橋川の歡迎會が催された。歡迎會の直前、會場の耶魯大學構内では排日大會が行われていたが、その参加者達が歡迎會へと流れ

て来た。橋川はこれに驚き理由を尋ねる。すると一人が「文化を以てすれば歓迎會、政治、外交を以てすれば排日大會になる」と述べ、喝采を浴びたという。國民感情も悪化の一途を辿る中、なお學術研究界と政治軍事情勢とは別次元との認識が存在しており、この認識が調査取行の決斷へと結びついたといえるだろう。

四 孫楷第を支えたその他の人々

これまでにさまざまな人物の關與が確認できたが、その他に孫楷第と關係した人々について、さらに初版本より確認をすすめたい。『東京書目』の序は胡適、題簽は傅增湘で、『通俗書目』の序は鄭振鐸と黎錦熙、題簽は錢玄同である（傅增湘、黎錦熙、錢玄同に師事したことは既に述べた通り）。

胡適は、當時北京大學教授で北平圖書館購書委員會委員でもあった。孫楷第との往來は、民國十九年（一九三〇）九月二十一日付の孫楷第の論文「與胡適之論醒世姻緣書」に始まるとみられる⁵⁶。胡適はこの論文を高く評價し、自身が企畫した亞東圖書館の點校本『醒世姻緣傳』（一九三三年）の卷首にその論文を掲載した。

鄭振鐸と孫楷第の交流は、民國二十年（一九三二）三月『大公報圖書副刊』に掲載された孫楷第の「夏二銘與『野叟曝言』」を鄭振鐸が読み、賞贊の書簡を送ったことに始まる。孫楷第は『通俗書目』編纂のため鄭振鐸宅を訪れ、藏書を閲覽した⁵⁷。鄭振鐸も『插圖本中國文學史』で『東京書目』を参照し日本の稀覯書を紹介している。また、初版本『東京書目』「緣起」最終段には以下の記述がある。

去歲東遊、先謀之傅沅叔、楊遇夫二師及錢稻孫先生、於旅行及觀書等事多所匡助。沅師更賜贖、俾壯行色、得以成行。……長澤先

生、原三七先生、田中慶先生、相伴周遊、頓忘勞苦。昨年の東遊の際、先に訪日した傅沅叔（増湘）、楊遇夫（樹達）の二師と錢稻孫氏に相談し、旅行や訪書等について大いに支援を受けた。傅増湘先生には更に錢別もいただき、旅立ちを勵ましていただき、お蔭で旅がうまくいった。……長澤先生、原三七先生、田中慶（太郎）先生の隨行は、旅先の苦勞をしばし忘れさせてくれた。

ここに錢稻孫、原三七の名も見出すことができる（但し、再版本では傅増湘、錢稻孫の名は削除されている）。

錢稻孫は、錢玄同の叔父で、外交官の父錢恂に同伴して十三歳から二十歳まで日本に滞在し、慶應幼稚舎などで學んだ。日本語が堪能で清華大學で日本語講師をつとめ、多くの日本人留學生と親交があった⁵⁸。民國十九年（一九三〇）、自宅に日本語圖書館「泉壽東文書庫」を開設し機關誌『字紙箋』等を發行した周作人と並ぶ北京隨一の日本通で、孫楷第も當文庫より情報提供を受けたと推測される。

原三七は、當時は東京帝國大學文學部支那文學科に在學中で、卒業後北京大學で教鞭を執った。終戦後は二松學舎大學で教える傍ら、湯島聖堂に書籍文物流通會を設けた。

さらに、『通俗書目』卷十の書目「日本訓譯中國小說」冒頭には「此日本倉石武四郎氏原稿」とある。倉石は、第一高等學校及び東京帝國大學では長澤の先輩で、昭和三五（一九二八、三〇）に北京へ留學し、孫楷第と交流があった。『通俗書目』「凡例十一」の經緯説明によれば、青木正兒の論文を見た孫楷第が、友人であった倉石にこの目錄の作成を依頼したという⁵⁹。この論文は岩波講座『日本文學』第十六回「日本文學と外來思潮との交渉（三）支那文學」（昭和七年九月十五日刊）

と推測される。『通俗書目』孫楷第自序が翌年一月、『通俗書目』出版が三月であることや印刷期間などを考慮すると倉石は相當短期間で作成したと思われる。⁽⁶²⁾

初版本『通俗書目』には、北平圖書館職員作成の歐米語譯(卷十二)及び滿州語譯(卷十二)の小説書目も附されている。初版本「中國通俗小説書目凡例十一」に記す歐米語譯書目の點檢者「西門」は、當時ドイツから北平圖書館に交換職員として派遣されていた、のちのロン・ドン大學教授で言語學者のウォルター・シモン(Ernest Julius Walter Simon)であるとみられる。⁽⁶³⁾ここからも國立北平圖書館が總力を擧げ支援した様子が窺えよう。

因みに、孫楷第の所屬した二機關は、義和團事變賠償基金の據出を受け、本格始動して間もない時期にあつた。⁽⁶⁴⁾資金面から見れば、通俗小説書目編纂は、歐米の對支文化事業の一環でもあり、日中のみならず歐米の支援も受けた學術交流の成果物であるとも言えるのである。では、日本への渡航調査の意義について學界ではどのように評價されたのであろうか。

五 訪日調査の意義

前述の通り、序及び題簽は當時の學界を代表する人物によるもので、期待の高さが窺える。とりわけ初版本『東京書目』の胡適序⁽⁶⁵⁾は中國學界での評價を示す一例として擧げられる。

專爲了看小説而渡海出洋、孫先生真可算是中國小説研究史上的可命布了！……我只要請讀此書的人回想十四五年前我開始作小説考證時、那時候我們只知一種水滸傳、一種三國演義、兩種西遊記、一種隋唐演義。……我們可以說、如果沒有日本做了中國舊小説的

桃花源、如果不靠日本保存了這許多的舊刻小説、我們決不能真正明瞭中國短篇與長篇小説的發達演變史！我們明白了這一點、方才可以了解孫先生此次渡海看小説的使命的重大。

小説を見るためだけに海を渡つた孫氏は、まさに中國小説研究史上のコロンブスである。……私はただこの書を読む人に十四年前、私が小説考證を始めた頃を思い出してほしい。我々は水滸傳は一種、三國演義は一種、西遊記は二種、隋唐演義は一種(の版本)を知るだけだつた……我々はこう言つてもよい。もし日本という中國古典小説の桃源郷がなかつたら、もし日本がかくも大量の古版の小説を保存してくれていなかったら、我々は中國の短篇、長篇小説の發達演變史を正しく明らかにすることは決してできなかったであろう。我々はこの點を理解してはじめて孫先生が今般小説を見に海を渡つた使命の重大さを理解できるのである。

胡適は孫楷第を「小説研究のコロンブス」だという。序文中の褒辭とはいへ、胡適が孫楷第の日本への訪書を高く評價したことは間違いない。この二書の編纂により、孫楷第は書誌學的小説史研究の第一人者として、その地歩を確かなものにしたのである。

また、日本を桃源郷に喩えるのは、胡適自身の體驗に基づいた言葉であろう。胡適は約十年前、青木正兒から資料提供を受けたことがあつたが、當時は、青木ですら内閣文庫本は目にしていなかつた。⁽⁶⁶⁾孫楷第が東京に赴き、多くの稀觀書を詳細に實見し記述したことは、胡適にとつて感慨深いものであつたろう。

ところで、北京の二機關が孫楷第の書目作成を支援したのは、當時の中國國內の學界事情も關係していたと思われる。周知のとおり當時は小説創作、雜誌出版、詩壇、京劇などで京派―海派の對立構造が生

まれていた。新小説の中心地は巨大な近代都市上海に移ったが、依然として古都北京は、他都市と一線を畫する重要な地位を保持していた。最先端の流行を追いかける上海文壇に對し、北京學界は、清代以前の白話小説史という上海文壇には成し得ない研究により、その存在意義を示そうとした、とも見做すことができよう。

一方、日本學界にとつてはどのような意義があつたのだろうか。多様なメディアも影印本もなかつた當時、中國本土にはない善本稀覯書を保存していた點において、日本は絶對的優位性を保持していた。特に、研究の緒に就いたばかりの小説研究分野では、それが著しく、二書が日本の優位性を更に顯著にしたのである。

長澤は、昭和七年（一九三二）を最後に、再び中國へ渡航することにはなかつた。⁽⁸⁸⁾『通俗書目』中で孫楷第未訪問の千葉掬香、蓬左文庫、宇治山田神社、米澤圖書館、佐伯文庫、大倉集古館の藏書については、長澤が情報を提供した可能性が高く、有力な協力者であり續けた。長澤の「新刊批評中國通俗小説書目」『書誌學』第一卷第三號、書誌學社、一九三三年五月）は以下の文で結ばれる。

舊冬來、予は久しく孫氏にも無沙汰をしてゐる。親友借華（筆者注、戯曲小説研究者の傅惜華をいう）にも便りをしない。……本書に接して、孫氏が一昨年の秋、幾晩か、あの黒い鞆をかゝへて訪れてくれ、親しく語り合つて夜の闇けるのも知らずにゐた、あの頃が憶ひ出されてならない。この兩人の親友と、再び膝を交へて語り得る日は何時であらう。それにしても、昨夏以來の不勉強で、兩

君に報告すべき新材料を何も持合せぬのが恥づかしい。孫楷第は、民國二三年（一九三四）より東方文化事業の『續修四庫全書提要』編纂にも携わり小説家類部門を擔當した。

二書出版後、日本人による孫楷第との交流記録は多くないが、『通俗書目』出版直後に北京に留學した目加田誠と小川環樹、「重訂通俗小説書目序」に名のある工藤篁に若干殘る。福岡縣大野城市目加田文庫藏「北平日記」⁽⁸⁹⁾には面會記録が、「李笠翁與十二樓」⁽⁹⁰⁾抜刷には孫楷第の署名がある。孫楷第は、盧溝橋事件後、訪中した鹽谷からの二度の面會依頼も斷り、民國三十年（一九四二）北平圖書館が日本軍に接されたのを機に、義憤から北平圖書館を辭職した。

終わりに

以上のように、孫楷第は、滿洲事變直後という全く想定外の非常事態の下、「學界は政界軍界に左右せられるものではない」との堅い決心の下に、長澤ら日本人の支援を受けて調査を敢行した。非常に短期間で多くの藏書先を回り稀覯書を閲覧、膨大な量の筆録を果したことは驚嘆せざるを得ない。調査敢行を支えたのは、孫楷第の純粹で強靱な探究心と、日中の研究者間でさまざま積み重ねられてきた信頼關係だつたであらう。その後、狀況が悪化の一途を辿り交流も困難になつていったことからすれば、これらの書目の出版自體奇蹟的なことで、小説研究分野における日中學術交流の貴重な成果物の一つと言えるだろう。

中華人民共和國成立後、孫楷第は主に社會科學院に在籍した。文化大革命の際、下放のために書店に預けた藏書がその後も返還されず、一九八六年失意のまま北京で亡くなった。

現在、東京大學東洋文化研究所の雙紅堂文庫及び倉石文庫には各々二書の初版本が藏されており、倉石文庫二書には孫楷第の獻辭を、雙紅堂文庫本には長澤の細かな書き入れを今も見ることができ

注

- (1) 『東京書目』の再版後の書名は『日本東京所見中國小説書目』（上雜出版社、一九五三年）、『日本東京所見小説書目』（人民文學出版社、一九五八年）となり、「提要」の二字が削除された。また、初版本『東京書目』、『通俗書目』のいずれも巻末の出版年記載に問題がある。『東京書目』には中華民國二十一年（一九三二）、『通俗書目』には中華民國二十二年（一九三三）とある。民國二十二年は西曆一九三二年であり、一致しない。事實は民國曆が正しい。
- (2) 『東京書目』収録書籍點數は以下の通り。内閣文庫（65）、宮内省圖書寮（11）、帝國圖書館（3）、東京帝國大學研究所（4）、徳富蘇峰成實堂文庫（7）、前田侯爵家尊經閣文庫（6）、靜嘉堂文庫（1）、長澤規矩也個人藏（5）、神山閏次個人藏（2）、文求堂書店田中慶太郎藏（4）、村口書店（4）。
- (3) 西本願寺第二二代門主大谷光瑞が藏書を寄贈したもの。現在、大連圖書館藏。大塚秀高「大連圖書館『大谷本』稗史小説について」（『中國古典小説研究』第九號、二〇〇四年）參照。
- (4) 稻畑耕一郎「傳增湘と内藤湖南——新發見の書函數通からの考察」（『早稻田大學大學院文學研究科紀要』第二分冊第六輯、二〇一五年二月）參照。なお、近年の中國圈での研究には、白雲「孫楷第的日本訪書」（『山東圖書館學刊』二〇一五年〇一期、山東圖書館學刊編輯部）、龔敏「孫楷第先生與『中國通俗小説書目』的編纂」（『止善』第十三期、朝陽科技大學通識教育中心、二〇一二年）などがある。
- (5) 初版、再版間の相違が大きいため、本稿では、當時の状況をより反映した初版本を基礎資料とする。また孫楷第の晩年、中華書局で編集を擔當した黃克氏によるインタビュー記録「建立科學的中國小説史學——孫楷第先生晩年「自述」及其他」（『文學遺產』二〇〇八年第四期、中華書局。

孫楷第の中國小説書目編纂と日中の學術交流

- 以下「晩年自述」と略稱）及び子息孫泰來氏の回想録「我的父親孫楷第」（『中國文化報』二〇一二年六月二十九日版第七面掲載。以下「我的父親」と略稱）を用いる。
- (6) 當時直隸提學使となっていた傳增湘は各地を複数回巡視していた。稻畑耕一郎「傳增湘と避暑山莊——殘された「日記」と「詩篇」と「寫真」からの考察」（『中國文學研究』第三九期、早稻田大學中國文學會、二〇一三年）參照。
- (7) 今村與志雄編『橋川時雄の詩文と追憶』（汲古書院、二〇〇六年）及び高田時雄編『橋川時雄 民國期の學術界』（臨川書店、二〇一六年）參照。傳一孫の關係については「橋川時雄回想録」その二「東方文化事業總委員會、北京人文科學研究所のこと」（前掲「橋川時雄の詩文と追憶」所收。以下「橋川回想録」と略稱）三四一頁參照。
- (8) 「魯迅日記」（『魯迅全集』第十五卷、人民文學出版社、一九八一年）一九二四年十二月二四日に「上午復孫楷第信」とある。
- (9) 孫楷第「寫在滄州後集」出版之後（『書品』一九八七年二期、中華書局）に「一九二八年下半年我在天津河北第一師範教書」、「一九二九年我在中國大辭典編纂處工作」とある。
- (10) 前掲注（5）黃克記錄孫楷第「晩年自述」一五三頁。
- (11) 吉川幸次郎「中國の文學革命」（『吉川幸次郎全集』第十六卷、一九七〇年、一九四七年講演原稿）二九二頁參照。
- (12) 『中國大辭典編纂處第三次報告書』（一九三一年五月）は二年前の「第一次報告書」（未見）を引用し「此係大辭典從近代語書籍中蒐集詞頭之先鋒的工作。……編成書目提要……是亦本辭典副產物之重要者」と記す。
- (13) 前掲注（5）黃克記錄孫楷第「晩年自述」一五三頁に「黎錦熙先生是編纂處主任、他覺得小説戲曲方面的詞條在過去詞書上很少列入、基本上是個空白。而我在這方面是有基礎的、就讓我從小説書目入手、先輯錄『中

國小説書目」とある。

- (14) 清代蒙古貴族の邸宅車王府が所藏した大量な戯曲や曲藝等の手抄本は、歴史的にも貴重な資料である。郭精銳他編『車王府曲本提要』（中山大學出版社、一九八九年）、首都圖書館編輯『清蒙古車王府藏曲本』（北京古籍出版社、一九九一年）、北京大學圖書館編『不登大雅文庫珍本戲曲叢刊』全二四冊（學苑出版社、二〇〇三年）、白化文『我的馬氏書情結』（劉倩編『馬隅卿小説戲曲論集』、中華書局、二〇〇六年）参照。

- (15) 辛島驍「魯迅追憶」（『桃源』第四卷第三號、一九四九年）に「魯迅に」最初に會つたのは昭和元年（一九二六年）の夏であつた。……小説戯曲の藏書家として聞えた馬遇卿（廉）氏に、紹介してもらつたのも、その時であつた」とあり、前掲注（8）「魯迅日記」一九二六年八月十七日にも「辛島驍君來。并送鹽谷節山所贈『全相平話三國志』一部、岡野同來」とある。

- (16) 長澤規矩也「わが菟書の歴史の一斑——戯曲小説書を中心に」（『東京大學東洋文化研究所藏雙紅堂文庫分類目錄』、一九六一年）参照。前掲注（14）『馬隅卿小説戲曲論集』には「與長澤規矩也關於『警世通言』的通信 附『蓬左文庫觀書記』（長澤規矩也）」などを収録する。長澤規矩也「馬廉氏の訃」（『書誌學』第四卷四號、書誌學社、一九三五年四月）からも二人の親しかった様子が窺える。

- (17) 吉川幸次郎『雨窗欵枕集』と私（『吉川幸次郎全集』第十六卷。初出は入矢義高譯『雨窗欵枕集』、創元社、一九四〇年）、長澤規矩也編『明清間繪入本圖録』（汲古書院、一九八〇年）、榮新江他輯注『倉石武四郎中國留學記』（中華書局、二〇〇二年）参照。『明清間繪入本圖録』は倉石が留學中に集めた馬廉らの藏書書影を、倉石の没後に長澤が刊行した。
- (18) 橋川時雄主編『文字同盟』第一卷（汲古書院、一九九〇年覆刻）、『長澤規矩也著作集』第五卷（汲古書院、一九八五年）参照。馬廉抄本は「小

說戯曲目錄五種 其三日本現存中國小説戯曲目」（前掲注（14）『馬隅卿小説戲曲論集』）である。

- (19) 周作人「隅卿紀念」（前掲注（14）『馬隅卿小説戲曲論集』所收。初出は『苦茶隨筆』、北新書局、一九三五年）五五一頁に「隅卿于二十年秋休暇往南方接着就是九一八事件」と記し、長澤規矩也「新刊批評 中國通俗小説書目」（『書誌學』第一卷第三號、書誌學社、一九三三年五月。以下「新刊批評」と略稱）二九三頁にも「馬氏は兼ねて本邦に訪書の希望を持つてゐられ、屢予にも話された。一昨年は愈之を實行し、孫氏も隨行することになつてゐたが、夫人の病氣で、馬氏は中止せられ」たとある。

- (20) 長澤規矩也「蓬左文庫觀書記」（前掲注（14）『馬隅卿小説戲曲論集』所收。一九二六年記）一一九頁に「唐土所佚之墳典、往往存於吾邦。前有『佚存叢書』、後有『古逸叢書』、『經籍訪古志』夙成、而『日本訪書志』亦出。而皆未及於戯曲小説也。而禹城所泯之書、則不但經史、至戯曲小説、殆有甚焉者也。嗚呼、繼林氏、黎氏之業、而成一叢刻、又效森氏、楊氏而詳考解題者、果在何人邪」とあり、長澤は従前より戯曲小説分野での日本の稀觀書目録作成を期待していたと思われる。

- (21) 前掲注（5）黃克記錄孫楷第「晚年自述」一五三頁には「至於路費、則由北圖出二百、編纂處出二百、傅增湘先生贈五十」とある。孫泰來「我的父親」は中國大辭典編纂處からの支給額を二百元としている。

- (22) 長澤規矩也「中華民國書林一瞥補正」（『長澤規矩也著作集』第六卷、汲古書院、一九八四年。初出は『書物春秋』、一九三二年）の文末に「昭和六年）九月六日長安丸上」とある。長安丸は大阪商船の高速ディーゼル船である。

- (23) 大阪商船パンフレット『天津へ』（一九三五年十月、靜永健氏藏）及び『時刻表復刻版』戦前・戦中編二（日本交通公社出版事業局、一九九九年）により出發日時を推測した。大阪商船及び近海郵船は二週間に三便（と

もに月・木・土曜天津出發）運行していた。

- (24) 『國立北平圖書館讀書月刊』第一卷八期（一九三二年）所收。待合時間に友人張竹賢（未詳）と附近の食堂に立ち寄っている。

(25) 「北」京から来た孫楷第にとつてこの日本の首都の地名は一寸愉快な氣持ちにさせるものがあつた。念願の渡日が實現したての第一日目の昂揚した彼の心中が垣間見られる。

- (26) 前掲注(23)『時刻表復刻版』により推定。九月十四日午前天津を出發、十八日午前八時神戸着。東京行寢臺急行は、神戸午後八時三分發東京翌朝八時三分着、午後九時二七分發同十時〇分着の二本がある。

(27) 「北平圖書館員謝國楨正倉院宮内省圖書寮及内閣文庫參觀昭和六年九月」（外務省外交史料館、レファレンスコード B05015841900）所收の駐日留學生監督處公函第二〇二號（九月十日起草）に「謝國楨……今般北平圖書館ヨリ留學シテ圖書ヲ採訪スル様派遣サレ來リ目下奈良正倉院ニ至リテ參觀」とある。

- (28) 前掲注(4) 稻畑論文参照。

(29) 前掲注(5) 黄克記錄孫楷第「晚年自述」一五三頁参照。舊牛込區内の孫文滞在地については陳錫祺主編『孫中山年譜長編』（中華書局、一九九一年）及び『東京朝日新聞』一九二九年十一月七日（七頁）・同八月（十一頁）参照。早稻田鶴巻町、高陽館（揚場町）、新小川町など複數が想定される。

- (30) 實藤惠秀『中國人日本留學史稿』（日華學會、一九三九年）第九章第四節「滿洲事變と留日學生」参照。

(31) 例えば慶應義塾の福澤諭吉が、戊辰戰爭中の明治元年（一八六八）舊曆五月十五日、上野で激しい砲撃が行われる中、平然と經濟學の講義を續けたことなどが想起される。

- (32) 前掲注(19) 長澤規矩也「新刊批評」二九三頁参照。

- (33) 前掲注(27) 所收。昭和六年九月二二日起草、同二三日發送。一連の資料は首たる申請者として謝國楨の名を記す。

(34) 中野三敏「長澤先生のこと」（『師恩——忘れ得ぬ江戸文藝研究者』、岩波書店、二〇一六年。初出は『書誌學』長澤規矩也博士追悼號、一九八一年）には、長澤の晩年も衰えぬ迅速で周到な手配のさまが描かれている。

(35) 謝國楨は一定期間孫楷第と同行した後、先に歸國したと思われる。謝國楨『晚明史籍考』（國立北平圖書館、一九三二年）には、東京で閱讀したと推測される書籍六點が収録される。書名は以下の通り。『皇明四朝成仁錄』『東林朋黨錄等六種』（以上靜嘉堂文庫）、『明遺民錄』（東洋文庫）、『白麓藏書鄭成功傳』（内閣文庫）、『鴨蘭紀事』（宮内省圖書寮）、『皇明中興聖烈傳』（内閣文庫及び長澤規矩也）。

(36) 前掲注(5) 黄克記錄孫楷第「晚年自述」一五三頁に「一切都是由熱情好客的長澤先生安排的。他帶我見了漢學專家鹽谷溫先生、鹽谷溫先生對我那篇『三言二拍源流考』的文章備加贊賞。我還結識了東洋文庫的幹事（相當於館長）石田幹之助先生和研究員、東洋史專家河（和）田清先生。記得河田清先生一見面就稱贊說、「你的『關於「兒女英雄傳」』的文章寫得很不錯啊！」隨後、長澤先生帶我去了内閣文庫的閱覽室、我便開始了緊張的抄錄各種中國小説版本的工作」とある。

- (37) 鹽谷溫「時代の通俗短篇小説」（『改造』第八卷第八號、一九二六年）は、『孔德月刊』第一・二期（一九二七年）に馬廉譯が掲載された。

(38) 楊樹達「積微翁回憶錄 積微居詩文鈔」（上海古籍出版社、一九八六年。以下『積微翁回憶錄』と略稱）一九二八年三月八日に「日本鹽谷節山溫博士率彼邦高等學校教授多人來京……博士于清末留學長沙一年、曾屢遇之」とある。

- (39) 前掲注(19) 長澤規矩也「新刊批評」による。商務印書館理事長張元濟（字

菊生)は一九二八年に來日、歸國後は長澤、田中らと連携し『續古逸叢書』など日本に残る善本を出版した。『張元濟全集』第十卷(商務印書館、二〇一〇年)参照。

(40) 長澤規矩也「收書遍歷十三」(前掲注(22))『長澤規矩也著作集』第六卷所收。初出は『大安』第十二卷第五輯、一九六六年)による。

(41) 傳增湘については前掲注(4)参照。前掲注(38)楊樹達『積微翁回憶錄』、張元濟『東瀛訪書記事詩』(『張元濟全集』第四卷、商務印書館、二〇〇八年)、董康『書舶庸譚』(中華書局、二〇一三年)参照。

(42) 長澤が村口半次郎と馴染みであったことは、長澤規矩也「思い出す人々」(前掲注(22))『長澤規矩也著作集』第六卷所收。初出は『日本古書通信』第三九卷第五號、一九七四年)三二八頁から窺われ、前掲注(16)長澤規矩也「わが蒐書の歴史の一斑」に村口書店の顧客として神山の名が見える(但し長澤は「神山潤治」と作る)。

(43) 書名は以下の通り。卷一『新雕大唐三藏法師取經記』(成篋堂、卷二『警世奇觀』(長澤)、卷三『皇明中興聖烈傳』(長澤)、卷四『汪澹漪評古本西遊證道書』(内閣)、卷六『新刻鍾情麗集』(成篋堂)、同卷『風流十傳』(長澤)。

(44) 川瀬一馬「經籍訪古志の成立——特に初稿本以前について——」(『神田博士還曆記念書誌學論集』、平凡社、一九五七年)二二頁に引く狩谷掖齋編「求古樓展觀書目」第一(文化十二年、一八一五。筆者未見)及び澁江抽齋・森立之撰『經籍訪古志』八卷(安政三年、一八五六)に匡郭計測記録がある。

(45) 中山久四郎「文求堂を頌へる」(『日本古書通信』第一一九號、日本古書通信社、一九五四年三月)参照。

(46) 田中壯吉編『「文求堂」主人田中慶太郎——日中友好的先驅者』(極東物産、一九八七年)、反町茂雄『反町茂雄文集 下』(八木書店、一九九三年)

参照。前掲注(41)董康『書舶庸譚』卷三、一九二七年三月十五日には「偕田中訪前田侯邸之永山。出宋槧數種」とある。「永山」は尊經閣文庫初代編輯方の永山近彰。また、前掲注(5)黄克記録孫楷第「晚年自述」参照。このほか初版本『東京書目』卷三『明清部』三『國志演義』二四卷二十四則には「田中氏此書購自北平來薰閣主人、自言以百五十元華幣得之、實爲異數。方氏爲余言此事時、稱心愉快、形於詞色。返國後、以詰來薰閣主人陳濟川君、乃亦淡然、若不復措意者。斯亦書林之清話、可資談劇者也」とある(再版本削除)。歸國間もない孫楷第の血氣盛んな息遣いが感じられる。來薰閣は琉璃廠にあった新興の古書肆で、主人陳杭(字濟川)は吉川幸次郎はじめ多くの日本人留學生とも親交があった。

(47) 初版本『東京書目』孫楷第序に「居東京月餘、……所藏小説部分、皆次第閱過。以歸心甚急、乃罷京都之行、迂道大連返平」とある。

(48) 前掲注(5)黄克記録孫楷第「晚年自述」一五四頁に「我取道門市(即馬關)、轉乘輪船、回到了大連」とある。

(49) 辛島驍は大正十五年(一九二六)滿鐵大連圖書館を訪問、「滿鐵大連圖書館大谷本小説戲曲類目錄上・中・下」(『斯文』第九編第三・四・六號、一九二七年)を發表しており、松崎との関わりが窺われる。長澤規矩也「三言」「二拍」について(一)(『斯文』第十編第九號、一九二八年)冒頭の謝辭に松崎の名を挙げ、「松崎鶴雄氏の好意によりて影片若干を得」とする(二四頁)。更に「三言」「二拍」について(二)(『斯文』第十一編第五號、一九二九年)二二頁に具體的提供箇所の説明がある。

(50) 前掲注(38)楊樹達『積微翁回憶錄』一九二八年同月十日に「師門遭難後、同門松崎柔甫曾以此文油印分佈、署名余」とある。また松崎鶴雄「湖南の博學葉德輝」(『柔父隨筆』、座右寶刊行會、一九四三年)には、葉德輝の門人、友人、日本人訪問者名が記され、當時の交流關係を知ることができる。

- (51) 松崎鶴雄「擁爐瑣言 大連圖書館と北京學者の聯絡」(前掲注(50))『柔父隨筆』所收)に「北平の孔德學校教授馬廉氏は、態々大連圖書館に警世通言を見に來た。……其の後北海圖書館や其の他の學者とも藏書を互に交換補充するやうに温かい聯鎖が大連圖書館と結ばれて來た」とある。「大連滿鐵圖書館所藏中國小說戲曲目錄」(『圖書館學季刊』第二卷第四期、中華圖書館協會、一九二八年十二月)冒頭に「十六年四月、因事南下。過大連時、於二十五日上午參觀日人建設之滿鐵圖書館」とある。
- (52) 松崎鶴雄「吳風楚月 中國の回想」(出版科學總合研究所、一九八〇年)。
- (53) 杉村勇造「柔父先生略傳」(前掲注(52)所收)、伊藤漱平「大連圖書館藏『大谷本』の來歴およびその現狀(上・中)」(『伊藤漱平著作集』第四卷、汲古書院、二〇〇九年所收。初出は古典研究會『汲古』第九・十號、汲古書院、一九八六年)、柴田清繼「漢學者松崎鶴雄その民國文人との文化交流——大連在任期を中心に」(『日本語日本文學論叢』第六號、二〇一一年)を参照。
- (54) 初版本『大連書目』孫楷第序に「該館閱覽時間、自上午九時起、至下午九時以後、猶許留止。如此辦法、乃大惠於余。每日晨九時入館、至十時步行回寓。凡五日閱訖。在此一日工作、幾等於在東京乃二日也」と、初版本『東京書目』孫楷第序には「抵塘沽之夕、爲十一月十五日、時則津變猶未已也。」とある。天津事件について前掲注(4) 稻畑論文・注(39)に言及がある。また、前掲注(38) 楊樹達『積微翁回憶錄』同年十一月二十日に「孫子書從日本歸、來謁、贈韻鏡一本、絨書夾一枚」とある。
- (55) 「學問の思い出——橋川時雄先生を圍んで」(『東方學』第三十五輯、一九六八年)二三五〜二六頁及び橋川時雄「天津、濟南及長江地方學術視察報告書」(前掲注(7))『橋川時雄 民國期の學術界』五五頁参照。なお當時の社會情勢については、さねとうけいしゅう(實藤惠秀)『中國小説書目編纂と日中の學術交流』
- 國人日本留學史」(くろしお出版、一九六〇年)、張競、村田雄二郎編『敵か友か』(岩波書店、二〇一六年) 参照。
- (56) 孫楷第論文は『滄州後集』(中華書局、一九八五年)に再録。また『胡適日記全集』(聯經出版事業、二〇〇四年)同年十月八日にも「孫楷第、馬□□君來」とあり、二人の交流が窺われる。但し、前掲注(5) 孫泰來「我的父親」は胡適との交際開始時期を一九二九年とする。
- (57) 鄭振鐸は『通俗書目』に寄せた序文で、訪ねて來た孫楷第の様子を「其熱忱有如一位中世紀的傳道士、有如最好奇的明清藏書家們傳錄着罕見的祕籍」と記す。また訪書地を限定せざるを得なかつた點に觸れ、孫楷第の今後の訪書地擴大への期待を述べた。
- (58) 四冊、樸社出版部、一九三二年十二月刊。
- (59) 吉川幸次郎「C教授」(『吉川幸次郎全集』第十六卷)、目加田誠「錢稻孫先生のこと」(『目加田誠著作集』第八卷、龍溪書舎、一九八六年)、鄒雙雙「文化漢奸」と呼ばれた男——萬葉集を譯した錢稻孫の生涯(東方書店、二〇一四年)「第一部第三章北京にいた日本人との交遊」参照。
- (60) 倉石武四郎「北京各大學の旁聽」(『中國語五十年』、岩波書店、一九七三年)、「述學齋日記」六月四〜十四日(前掲注(17))『倉石武四郎中國留學記』所收) 参照。前掲注(38) 楊樹達『積微翁回憶錄』一九二九年七月六日には「日本倉石武四郎來訪。此君頭腦明晰、又極好學、可畏也」とある。
- (61) 原文は以下の通り。「至日本訓譯中國小説、日本青木正兒先生先以所撰支那文學一文見示、其下篇江戶期俗文學影響一章、記述最詳。因所載書十之八九未得目觀、不敢私行輾轉摘錄、致有毫釐千里之誤。遂函友人倉石先生請代撰一簡目、旋即以手寫稿寄來、目中記板本甚詳、體例亦至明晰。今不敢掠美、仍於篇中存作者姓名、作爲附錄之一種」。
- (62) 或いは倉石が事前に作成していた資料を提供した可能性もある。

- (63) 初版本「中國通俗小説書目凡例 十一」に「又本書所附西譯中國小説略目、經德國西門先生勘定再三、益臻完密」とある。榎一雄「サイモン教授千古」(『東洋學報』第六十三號、一九八二年)、オーストラリア國立圖書館シモンコレクション項目 <https://www.nla.gov.au/selected-library-collections/simon-collection> (最終アクセス日二〇一六年一月十四日) 参照。
- (64) 阿部洋『對支文化事業』の研究(汲古書院、二〇〇四年)「補論 アメリカの對華文化事業」参照。『國立北平圖書館業務報告』(一九三二年)所收「收支對照總表」では、收入總額のうち米國基金會據出金が九八・一パーセントを占める。更に本資料より『東京書目』の初版出版部数が一千部とわかる。また『中國大辭典編纂處第三次報告書』(一九三一年)所收「董事會董事表」では、趙元任(アメリカ)、蕭瑜(フランス)を各國基金會所屬と記す。
- (65) 『胡適論學近著』第一集(商務印書館、一九三五年)卷三再録。『胡適全集』第四卷(安徽教育出版社、二〇〇三年)にも收録される。前掲注(4) 稻畑論文・注(41)に「古典白話小説研究の草創期の熱氣が彷彿とされ、學術史的にも重要な文章である」との評がある。
- (66) 加藤國安「中國社會科學院藏青木正兒書簡について——胡適との往復書簡」(名古屋大學文學部研究論集文學第五五號、二〇〇九年)一三五頁、名古屋大學附屬圖書館カタログ『遊心』の祝福——中國文學者・青木正兒の世界(二〇〇七年)二〇〇～二二頁参照。
- (67) 青木正兒「支那文學研究に於ける邦人の立場」(『青木正兒全集』第七卷、春秋社、一九七〇年。初出は『東京帝大新聞』、一九三七年六月)は昭和初期までの學界狀況評で参考になる。青木は「未開の分野を拓いたものは戯曲小説等通俗文學の評価を高めたことであつた。其等は固より歐洲文化の影響に因るものであるが、支那の學界に先んじて覺醒し、
- 而して歐洲の支那學者よりも有力な立場に在つたのである」と述べる(四六頁)。
- (68) 前掲注(40) 長澤規矩也「收書遍歴十三」二七六頁に「六年の夏には……下士官を、京奉線の車内でたしなめて、隊長副官をあやまらせたりし……軍部がのさばる民國へは出かけようとはしなかつたからである」とある。
- (69) 前掲注(19) 長澤規矩也「新刊批評」二九三頁に「予も及ばず乍ら、孫氏未見の書物について少しばかり材料を提供し得た」とある。前掲注(16) 長澤規矩也「わが蒐書の歴史の一斑」で千葉掬香藏書が昭和七年(一九三二)散逸したとし、「予は數度縦覽した」とある。長澤は大正十五年(一九二六)蓬左文庫で『警世通言』等を調査した。服部宇之吉編刊『佚存書目』(一九三三年)『長澤規矩也著作集』第九卷、汲古書院、一九八五年再録)の「附載三」(明清の戯曲小説類書目)には、宇治山田神社(神宮文庫)、米澤圖書館、大倉集古館の藏書が記載される。
- (70) 大塚秀高「孫楷第の提要」(『さまざま研究動態』八、一九九一年)、山根幸夫「東方文化事業の歴史——昭和前期における日中文化交流」(汲古書院、二〇〇五年)四九頁、「顧震福、劉盼遂、王重氏(民)、孫楷弟、周叔迦二編纂囑託ノ件 昭和九年二月」(外務省外交史料館資料、レフアレンスコード B05015913200) 参照。
- (71) 小川環樹「留學の追憶」(『小川環樹著作集』第五卷、筑摩書房、一九九七年。初出は『颯風』第十八號、一九七六年)四三八頁には「孫楷第ね……それはとても氣のいい人でね、何でも教えてくれた」とある。目加田誠「雪心庵隨想 北京今昔その一」(『春花秋月』、時事通信社、一九九二年)二五頁には「小説史研究の孫楷第氏とは特に親しくなつた。彼は研究室の本棚の間に木箱を二つ置き、その上に板を渡して蒲團を敷いて寢泊まりして、猛烈に勉強していた」と記す。工藤篁「孫楷第『述

也是園舊藏古今雜劇』(『一橋論叢』第九卷第三號、一九四二年)の冒頭には「昭和十三年の夏戦火未だ熄まざる北京にて、著者孫楷第氏と久闊を敘し歡談に時を移した」とある。

(72) 目加田誠の北京留學中(一九三三〜三五年)の日記。到着直後の一九三三年十月二十五日に「中國辭典編纂所(府右街)に孫楷第氏を訪ふ。鹽谷先生より依頼せられしことを傳へたり。氏は甚だ神經質にして氣むつかしき人物なり」とあり、以降、複数回の往來記録がある。

(73) 『圖書館學季刊』第三・四合期(中華圖書館協會、一九三五年十二月)所收。

(74) 東京大學東洋文化研究所倉石文庫所藏『東京書目』、『通俗書目』、同所『雙紅堂文庫』全文影像資料庫 <http://hong.ioc.u-tokyo.ac.jp> (最終アクセス日二〇一六年一月十四日) 参照。